

【 I D 】 S 2 4 0 0 0 5 1 0

【 想 定 尺 】 9 0 分

【 タ イ ト ル 】 ボ イ ズ ・ ラ ブ オ ー ル

【 氏 名 】 江 連 泰 知

【 メ ー ル ア ド レ ス 】 taichi.ezu@gmail.com

【あらすじ】

主人公・酒居麻己は卓球部に所属する男子中学生である。麻己はある男子に片思いをしていたが、偶然から当該男子が男性同士の恋愛に嫌悪感を抱いていることを知ってしまった。失恋した麻己は、自分が「普通」ではないことへのトラウマを抱く。

3年後、高校生になった麻己は、東京へ進学すべく勉学に励んでいた。

同時期、麻己は卓球部の同期である開藤航助から、ダブルスを組もうと誘われる。受験勉強に集中したい麻己はそれを断るも、麻己の實力を知る航助はしつこく食い下がってくる。

一方、麻己は受験勉強の傍ら女装コンカフェでアルバイトも行っていた。そこは麻己にとっては内に秘めた女性的な嗜好を隠さずにいられる唯一の場所であった。

ある日、麻己はバイト先の余興で卓球の腕前を披露する。これがきっかけで、店を訪れていた航助に正体がバレてしまう。麻己はバ

イトの件を秘密にする代わりに、航助とダブルスを組むことを承諾する。3週間後、航助は練習に加え作戦会議もしたいと提案するが、勉強時間を確保したい麻己に却下される。そこで航助は麻己のバイト先を訪れ、接客の一環として作戦会議を行うことを所望する。この一件から麻己はひたむきな性格の航助に惹かれていく。そんな矢先、麻己は暴漢から同僚を庇ったことで右腕を負傷し、卓球が不可能になる。その上、母親に内緒でバイトをしていたことがバレ、東京への進学も禁じられてしまう。加えて、女子部員が航助の新たなパートナーに立候補したことから、麻己は激しい嫉妬にかられ、航助と喧嘩になってしまう。その最中、航助に「普通じゃない」と罵られたことで麻己はトラウマが刺激され、乱心の勢いで航助に対する恋愛感情を告白してしまう。それを受けて困惑する航助を見た麻己は、再び失恋をしたと思いい、航助の前から去っていく。

しかし、航助は麻己と過ごした日々が楽しかったという己の本心と向き合い、麻己を受け入れる決断をする。

1年後、大学生になった2人が交際する姿がそこにあった。

【登場人物表】

|         |      |      |       |     |
|---------|------|------|-------|-----|
| 酒居麻己    | （14） | （17） | （18）  | 高校生 |
| 開藤航助    | （14） | （17） | （18）  | 高校生 |
| 酒居満智子   | （54） | 麻己の母 |       |     |
| 西澤東十郎   | （21） | （22） | 麻己の同僚 |     |
| 玉川結衣    | （17） | 高校生  |       |     |
| 小沼俊夫    | （30） | （31） | 会社員   |     |
| 虎石翔馬    | （15） | 中学生  |       |     |
| 中村信吾    | （17） | 高校生  |       |     |
| 男子中学生   | A    |      |       |     |
| 男子中学生   | B    |      |       |     |
| 男子中学生   | C    |      |       |     |
| 教師      |      |      |       |     |
| 店員      | A    |      |       |     |
| 店員      | B    |      |       |     |
| 店員      | C    |      |       |     |
| 女装男子    |      |      |       |     |
| インタビュアー |      |      |       |     |
| 卓球部員    |      |      |       |     |
| 浮浪者風の男  |      |      |       |     |

○市営住宅・外観（朝）

2階建てのアパート。

天気は曇りである。

○同・酒居家・台所（朝）

酒居麻己（14）が冷蔵庫の前に立っている。

麻己、冷蔵庫を開ける。

庫内にはハート形の型に入ったチョコが入っている。

麻己、チョコを取り出して揺らし、チ

ョコが固まっていることを確認する。

満智子の声「麻己、朝御飯早く食べなさい」

麻己「うん、今行く」

麻己、チョコを胸元に近づけて抱くようにする。

○益久戸中学校・外観（朝）

古い中学校の校舎。

曇天で、校庭の樹々は葉が落ちている。

○同・門・外（朝）

校門に「双葉市立益久戸中学校」と書かれていた。  
制服姿の麻己が校門に向かって歩いていく。麻己は制服の下に小包を隠している。

○同・3年4組・外（朝）

麻己が小包を胸元で持ちながら教室に向かつて歩いている。

麻己、教室の扉の前で深呼吸する。

翔馬の声「おい！何描いてんだよ！」

麻己、背中を教室側の壁につけ、教室内の様子を覗く。

○同・内（朝）

虎石翔馬（15）が黒板の前に立っている。

黒板には相合傘が描かれ、「麻己」および「翔馬」という名前が書かれている。

黒板周辺に数名の男子中学生がいる。

○同・外（朝）

麻己、黒板に描かれた相合傘を見て目を丸くし、一層強く小包を抱く。

○同・内（朝）

翔馬と数名の男子中学生が黒板の前に立っている。

黒板には翔馬と麻己の名前が描かれた相合傘が描かれている。

翔馬、相合傘を手で叩く。

翔馬「何だよこれ！やめろって！」

男子中学生らはニヤニヤと笑う。

男子中学生A「またまた照れちゃって」

男子中学生B「いつも一緒にいるし」

翔馬「それは、部活が同じだから」

男子中学生C「デキてんだろ、お前ら」

翔馬「なわけないだろ！大体」

男子中学生A「ん？」



翔馬「男同士とか普通じゃねーよ、キモイって！」

翔馬、必死の形相で黒板の相合い傘を消し始める。

○同・外（朝）

麻己、小包をますます強く抱き、押し潰す。

○同・内（朝）

黒板の前に翔馬と数名の男子中学生が立っている。

翔馬は黒板に描かれた相合傘を必死で消している。

教室の外から走る足音が聞こえてくる。  
男子中学生B「何だあ？誰か来たのか？」

一同、教室の扉を開けて廊下を見るが、誰もいない。

○路上・歩道（朝）

街路樹として桜の木（蕾のみが生えている）が植えられた歩道。

雨が降っている。

傘を持った人々が一方向に向かって歩いている。

麻己は傘を持たず、人々の流れに逆らってふらふらと歩いている。

麻己とすれ違う人は怪訝な顔で麻己を見ながら避けている。

麻己「（呟く）普通じゃない。普通じゃ」

麻己、俯いて涙を流す。

○明津大学付属高校・外観

T・3年後。

校門に「明津大学付属高等学校」と書かれている。

校庭には散りかけの桜の木がある。

校門から続く道の脇には花壇がある。

○同・普通科C組教室・内

教壇に教師が立ち、模試の成績表を配  
っている。

30名ほどの生徒らが互いに成績を見  
せあっている。

麻己（17）は席に座り、閉じた成績  
表を手にかけている。麻己、恐る恐る  
成績表を開く。麻己、成績表の「早稲  
田大学」の欄に「D判定」と書かれて  
いるのを見て、成績表をピシヤリと閉  
じる。麻己、再び成績表を開き、今度  
はまじまじと見て肩を落とす。

教師「お前ら一旦座れ」

生徒ら、着席する。

麻己、他の生徒から成績表が見えない  
ように立てる。

教師「いいか、今回の結果に一喜一憂するん  
じゃないぞ」

麻己、成績表を睨む。

教師「あと半年以上あるんだ」

麻己、教師を見る。

教師「C判定位なら全然巻き返せる」

麻己、成績表の「D判定」の部分を見ながら胃の辺りを押さえる。

○同・昇降口・内（夕）

リュックを背負った麻己が険しい表情で下駄箱に向かって歩いている。

麻己が下駄箱に手を掛けた時、麻己のズボンのポケットでスマホが鳴る。

麻己、ズボンのポケットから右手でスマホを取り出す。麻己、スマホの画面を見て体を強張らせる。

卓球のラケットを持ち、ウェアを着た開藤航助（17）が校舎側から走って昇降口に入ってくる。

麻己「ママ？」

麻己がスマホをタッチするとメッセージアプリの画面になり、「ごめんね。急に夜勤入っちゃった。」というメッセージ

ジが表示される。

麻己は溜息をつき、体の力を抜く。

航助、息を切らしながら麻己の側に歩いて来る。

航助「酒居！」

麻己、航助の方を向く。

航助「やっと見つけた」

麻己「何の用？ 僕、帰るんだけど」

航助、首をを何度か振る。

航助「待ってくれ、頼みが」

麻己、わざとらしく溜息をつく。

麻己「ダブルスのことなら、組まないよ」

麻己、下駄箱の方を向き、開ける。

航助「そこを何とか、なっ！」

航助、顔の前で手を合わせようとして手に握ったラケットを見る。航助、苦笑いしながらラケットをズボンのウエスト部分に挟み、手を合わせる。

航助「頼む！」

麻己「普通に考えて」

麻己、下駄箱から右手で靴を取り出して航助に向き直る。

麻己「受験に集中する時期だと思うけど」

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「あいや、俺進学コースじゃないから」

麻己「そうかい、僕は進学コースだ」

麻己、航助に背を向ける。

麻己「じゃ、そういうことで」

航助「ま、待ってくれて」

航助、麻己の肩を掴む。

麻己、ビクンと肩を跳ねさせ、航助の

手を振り払うようにして振り向く。

麻己、航助を睨む。

航助「あ、ごめん」

麻己「別に他の部員と組めばいいじゃないか」

航助、首を振る。

麻己「普通そうすると思うけど」

航助「だめなんだ」

麻己「どうして」

航助「ダブルスで組むなら俺と同じくらいの



と書かれた看板が掛けられている。

○同・裏口・外（夜）

小型ビルの裏手、地下へ続く裏口。マ  
スクを着け、リュックを背負った私服  
姿の麻己が裏口から店内に入っていく。

○同・更衣室・内（夜）

ロッカーが並ぶ更衣室。「アサ」とい  
うネームプレートが貼られたロッカーの  
前に麻己がいる。

その隣には、「トーチン」と書かれたロ  
ツカーがある。

麻己、服を脱ぐ。麻己、ロッカーを開  
け、女性用のゴスロリ服を取り出して  
着用する。麻己、ロッカーから「アサ」  
と書かれた名札を取り出し、胸元で両  
手と重ねる。



○同・ホール・内（夜）

ホール内には西澤東十郎（21）を含む女装した男性店員と数名の客がいる。西澤は「トーチン」と書かれた名札を付けており、他の店員も各々名札を付けている。店員らはカウンター越しに接客をしている。カウンターの内側には酒やグラスが置かれ、足元には小型の冷蔵庫や段ボールが置かれている。ホール内には卓球台が置かれている。小沼俊夫（30）が机に突っ伏して寝ている。ホール奥の扉を開け、メイクと女装をし、名札を付けた麻己が入ってくる。西澤「アサ！おつー」

小沼「え！？アサちゃん来たの？」

麻己、笑って両手を握り合わせ、小首をかしげる。

麻己「お待たせっ」

麻己、顎の下に両拳を当てる。

麻己「皆の妹、アサだよっ」

麻己、歩き出す。

○同・外観（夜）

軒先に1匹の蝙蝠がぶら下がっている。

○同・更衣室（夜）

私服姿の麻己が「アサ」と書かれた口ツカいの前の椅子に座って英単語帳を読んでいる。麻己の足元にはリュックが置かれている。更衣室の扉を開けて女装した西澤が入ってくる、

西澤「お八口ー、戸締り終わったよ」

麻己、顔を上げて西澤を見る。

麻己「お疲れ様です」

西澤、麻己が持つ単語帳を見て口笛を吹く。

西澤「お勉強？やるう」

麻己「普通ですよ、高3なんで」

麻己、リュックに単語帳をしまう。

リュックには参考書や教科書が入って

いる。

西澤「いやー、俺は全然勉強しなかったなあ」

麻己「そうなんですか？」

麻己、話しながらリュック内の本を1

冊ずつ確認し始める。

西澤「ま、それでも暮らすには困らないよ」

麻己「西澤さん、金遣い荒いのに」

西澤「最近これできてさ」

西澤、小指を立てる。

麻己「はあ？」

西澤「宿と飯は保証されてんのよ」

麻己「サ ITEー」

西澤、ニヒヒと笑う。

西澤「てかさつきから何してんの？」

麻己、手を止める。

麻己「いや、参考書が1冊足りなくて。あっ」

麻己、額を打つ。

西澤「どした？」

麻己「貸してたんです」

西澤「あー、なるほど」

麻己「明日返してもらわなきゃ」

麻己、リュックを閉じる。

西澤「ま、失くしてなくてよかったじゃない」

麻己「はい」

麻己、リュックを背負って立ち上がる。

麻己「じゃあ、お先失礼します」

西澤「うん、気をつけて」

麻己、頭を下げて更衣室を出ていく。

○明津大学付属高校・外観

雲間から覗く太陽に照らされる校舎。

航助の声「酒居！待って！待って！待って！待って！待って！」

○同・スポーツ科教室・外

スポーツ科の教室の外の廊下。

航助が麻己の左腕を引いている。麻己

は右手に参考書を持っている。

教室内から玉川結衣（17）を含む生

徒らが麻己と航助の様子を見ている。

結衣は麻己を睨んでいる。

麻己、生徒らを見る。

麻己「静かにしてよ。目立つだろ」

航助、教室の方を見る。

航助「ああ、ごめん」

航助、麻己の腕を引くのを止める。

麻己、左腕で自身の体を抱くようにす

る。

航助「わざわざこっちの教室まで来てくれた

もんだから」

航助、ポリポリと後頭部を搔く。

航助「テンションが上がっちゃって」

麻己「君に用があったわけじゃない」

麻己、参考書を軽く掲げる。

航助「ああ。中村に貸してたんだって？」

麻己「そういうこと。じゃあ」

麻己、航助に背を向ける。

航助「あのさ！」

麻己、航助に向き直る。

麻己「何？」

航助「今日部活に顔だけでも出してかないか」

麻己、溜息をつく。

麻己「OBじゃないんだから」

航助、苦笑いする。

航助「それもそうか、引退してないしな」

麻己「実質引退したようなものだけど」

航助「そんなことないって、最後の試合が」

麻己「出ないよ。進学コースなら皆そうする」

麻己、胸の下で腕を組む。

麻己「それが普通」

航助「普通はそうかもしれないけど」

航助、両手を合わせる。

航助「そこを曲げて、俺と組んでくれ」

麻己「なんでそこまで」

航助「ダブルスの結果が団体戦の勝敗を決め

るって聞いたことねえか？」

麻己「まあ、あるけど」

航助、拳を振り上げる。

航助「俺はダブルスで勝つ！」

麻己、身を引く。

航助「そしてチームを勝たせてえんだ！」

麻己と航助、見つめ合う。

麻己、航助から視線を逸らす。

麻己「僕にそんな熱意はないよ」

航助「どうして」

麻己「別に」

航助「中学の時、あんなに強かったのに」

麻己「よせよ」

航助「なんかあったのか？」

麻己、自身の体を抱くようにする。

麻己「昔の話はよせって言ってるだろ！」

航助、ビクンと身を震わせる。

航助「え、あ、ごめん」

麻己「もう、この話はしたくない」

麻己、航助に背を向けて歩き出す。

航助、歯噛みして首を振る。

教室から結衣が出てくる。結衣、航助

の隣に立って麻己の背に視線を向ける。

結衣「（小声で）感じ悪い」

航助「結衣」

結衣「航助も航助だけど」

航助、自らを指差す。

航助「俺が？何でだよ」

結衣「どうしてあの人にこだわるの？」

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「酒居とは別の中学だったんだけど」

結衣「うん」

航助「1回だけ、大会で当たってさ」

航助、目を閉じて拳を握る。

○（回想）総合体育館・内

卓球台が多数置かれ、中学生らがシン  
グルスで戦っている。

うち1つの卓球台で麻己（14）と航  
助（14）がラリーを行っている。

2人の脇の得点表は麻己が10点、航  
助が5点であることを示している。



麻己が踏み込んで打った球は、航助の脇を通り過ぎる。

航助はウンテンポ遅れて球の軌跡を目で追う。

航助の声「ボロ負けしたんだよな」

航助、ゆっくりと球を振り返った後、得点表に視線を移す。

審判が麻己の得点を11点に変える。

航助の声「ダブルスコアで」

航助、膝から崩れ落ちる。

麻己、タオルで汗を拭く。

○元のスポーツ科教室・外

廊下に航助と結衣が横並びで立っている。結衣は口をポカンと開けている。

結衣「ダブルスコア！？そんなことあるの？」

航助、両手の拳をぎりぎりと握る。

航助「プライドが傷ついたら」

結衣「だったら尚更なんで」

航助「その大会の後」

航助、廊下の奥を見る。

航助「酒居は何故か大会に出なくなつた」

結衣「えっ」

航助「噂だと部活自体辞めたつて」

結衣「なんで？」

航助「さあ。ただ」

結衣「ん？」

航助「俺はリベンジできないまま終わった」

結衣「そっか」

航助「結局、高校でも」

航助、首を振る。

結衣「航助」

航助、結衣を見る。

航助「だからせめてダブルスで組んで、あいつに俺の実力を認めさせたいんだ！」

航助、廊下の奥を睨む。

結衣、航助の横顔を見つめ、腰の下で手を握り合わせる。

○まいまい・ホール・内（夜）

ホールの隅の卓球台でラケットを持った麻己（女装姿）に対し、ラケットと球を持った小沼含む10人の客が向かい合っている。  
カウンターでは西澤が航助および航助の隣の男性の接客をしている。  
航助はグラスを額に当てて俯いている。  
航助の隣の男性は酔い潰れて机に突っ伏している。

小沼「本当にいくよ、アサちゃん」

麻己「はい。いつでもオーケーですっ」

小沼含む客ら、一斉にレシーブを行う。

航助、振り向いて麻己を見る。

麻己、自分の方に跳んできた球の内、8個を返す。

客ら、啞然として麻己を見る。

麻己、舌を出す。

麻己「あちゃー、前は全部返せたんだけど」

小沼「いやいやいや、十分すごいよ！」

麻己、クスクスと笑う。

航助、麻己を見て呟く。

航助「あの子」

西澤「アサちゃん気になります？」

航助、西澤を見る。

航助「えっ」

西澤、麻己に向かって手を振る。

西澤「アサ！」

麻己「はい」

西澤「アサとお喋りしたいんだって」

麻己「やったあ、今行きますね」

麻己、西澤に入れ替わるようにして航

助の前につく。

麻己「初めましてお兄様！アサですっ」

航助「酒居だよなっ！？」

麻己「は？」

麻己、航助の顔を見て、笑顔がひきつ

る。

麻己「（小声で）げっ」

航助「あんな芸当ができるなんて、やっぱり」

麻己「お兄様！」

麻己、カウンタ―に身を乗り出す。

麻己「酔っぱらってますう？」

航助「いや、てか俺高校生だし」

麻己「外の空気吸いませんか？」

航助「だからさあ」

麻己「ご案内しますから、ねっ？」

麻己、航助を睨む。

航助「は、はい」

麻己、ニコツと笑顔を作って小首をかしげる。

○同・裏口・外（夜）

女装した麻己が腕で自分の身体を抱くようにした状態で壁に寄りかかってい  
る。

麻己の正面に航助が立ち、後頭部をポ  
リポリと搔いている。

麻己「そう、君のお兄さん常連なの」

航助「ああ」

麻己、溜息をつく。

航助「気分転換にお前も来いって言われてさ」

麻己「それでノコノコついてきたってわけ？」

航助「ノコノコって。まあそうだな」

麻己「参ったな」

航助「一個気になったんだけど」

麻己「何？」

航助「なんでバイトしてるんだ？」

麻己「なんでって」

航助「勉強で忙しいって言ったのに」

麻己「それは」

麻己、より強く自身を抱いて航助から目を逸らす。

麻己「その、なんといいか」

航助、首を傾げる。

麻己、ハツと口を開ける。

麻己「来年のためにお金がいるんだよ」

航助「来年？」

麻己「学費とか、一人暮らしの生活費とか」

航助「家から通わねえの？」

麻己「東京に？無茶だね」

航助「そんなに東京行きてえのか」

麻己「別にそんな変なこと言っていないだろ」

航助「ま、まあな」

麻己、航助から目を逸らす。

航助「にしたって、なんでこんな店で」

麻己、食い気味に言う。

麻己「時給いいから」

航助「ああ」

麻己「短い時間で稼いで勉強しないと」

航助「なるほど、な」

航助、後頭部をポリポリと掻く。

麻己「あの、一応言っとくけど」

航助「ん？」

麻己「このことは誰にも言わないですよ」

麻己、航助を睨む。

航助、顔をしかめる。

航助「そりゃいいけどよ」

航助、口元に手を当てる。

航助「いや」

麻己「えっ？」

航助、指を1本立てる。

航助「誰にも言わないからさ」

麻己「何？」

航助「ダブルス、組んでくれよ」

麻己、一瞬目を丸くした後、航助を睨

む。

麻己「ずるいんだな、君」

麻己、自分の身を抱いて俯く。

航助、アワアワと手を振る。

航助「あいや、やっぱ」

麻己「わかったよ」

航助「え」

麻己、顔を上げる。

麻己「やればいいんだろ」

航助「マ、マジ？」

麻己「他に選択肢はないだろ」

航助「あ、うん、まあ」

麻己「ただし」

航助「おう」



麻己「練習より勉強が優先、それでいい？」

航助、唸る。

航助「ああ！それで構わねえ」

麻己、深々と溜息をつく。

麻己「全く、理解できないよ」

航助、へへへと笑う

航助「じゃあ、明日から頼むぜ」

麻己、溜息をついて裏口の扉を開ける。

航助「どこ行くんだ？」

麻己「仕事に決まってるじゃない」

麻己、首を振る。

麻己「途中で抜けちゃったんだから」

航助「そうか、そりゃそうだよな」

麻己、裏口から入っていき、扉を閉める。

航助、後頭部をポリポリと搔く。

○市営住宅・外観（夜）

2階建てのアパート。

○同・酒居家・寝室（夜）

暗い部屋の中で麻己が布団に包まり、スマホで動画を見ている。スマホの画面には歌舞伎町一番街アーチが映っているのに加え、ニュース番組のロゴと「東京ファッショント集」というテロップが表示されている。

○歌舞伎町一番街アーチ・外観（夜）

アーチの下を多様な服装の人々が行き交っている。一部の者は女装している。門の周辺にはインタビュアーを含むニュース番組のクルーと地雷系ファッションに身を包んだ女装男子がいる。

○同・門前（夜）

ニュース番組のクルーのうち、インタビュアーが女装男子にマイクを向けている。

インタビュアー「どうして女装してるんです

か？」

女装男子「えー、可愛いからかなあ」

インタビュアー「珍しいファッションだと思  
いますか」

女装男子「東京じゃ普通ですよ、だって」

女装男子、アーチを行き交う人々を見  
る。

女装「好きなカッコしてる人ばっかだし」

女装男子、体をくねらせる。

○市営住宅・酒居家・寝室（夜）

暗い部屋の中で麻己が布団に包まり、  
スマホを見ている。

麻己、微笑んで頷く。

○同・居間（朝）

卓上にに2人分のハムエッグとポター  
ジュ、牛乳が置かれている。寝間着姿  
の麻己が目をこすりつつ寝室から居間  
に入ってくる。

満智子の声「麻己、起きたー？」

麻己、寢室とは別方向の扉を見る。

酒居満智子（54）がその扉を開けて  
部屋に入ってくる。

満智子「おはよう」

麻己「おはよう。帰ってたんだ」

満智子「うん。オムライスおいしかった？」

麻己「うん」

満智子、微笑んで頷く。

満智子「パン焼けるから、食べちゃお」

満智子、食卓に座る。

麻己、その向かいに座る。

満智子、手を合わせて麻己を見る。

麻己、手を合わせる。

満智子「いただきます」

麻己「いただきます」

麻己、牛乳を口にする。

満智子「勉強順調？」

麻己、手を一瞬止めた後、牛乳を飲む。

麻己「うん」

満智子「あんまり無理しちゃだめよ」

麻己「大丈夫だよ」

満智子「本当？」

麻己「うん」

満智子、微笑んで麻己をじっと見る。

満智子「早稲田が無理でも、良い大学はある

もの」

麻己、ハムエッグをほとんど噛まずに

飲み込み、慌てて言う。

麻己「東京は、大学多いしね」

満智子「やだ。こっちのって意味よ」

麻己「ああ」

麻己、肩を落とす。

満智子「だってそうじゃない」

満智子、手を組んで顎を乗せる。

満智子「同じランクなら地元の方がママ安心」

麻己「うん、わかってる」

満智子「ママ、麻己が大切なの」

麻己「わかってるって」

満智子「よろしい」

満智子、微笑んで頷く。

満智子「今日も夜勤だから」

麻己「うん」

満智子「いい子に留守番してて」

麻己「勿論」

麻己、唇を舐める。

麻己「いつも通り、ちゃんと家にいるよ」

麻己、ポタージュを口にする。

満智子「夕ご飯は」

麻己、慌ててポタージュから口を離す。

麻己「コンビニで買うから大丈夫」

満智子「そお？栄養バランスとか」

麻己「今時はサラダとかあるし」

満智子「そうなの」

麻己「うん、それより仕事頑張ってる」

満智子「ありがとう、麻己」

台所からトースターの音が聞こえる。

満智子「トーストできたみたい。食べてて」

満智子、立ち上がって台所に向かう。

麻己、満智子が去ったのを見て、顔を

覆い、深く息を吐く。

○明津大学付属高校・外観（夕）

桜の木が緑に色づいている。

○同・体育館・外観（夕）

高校の敷地内にある二階建ての体育館。

○同・卓球練習場・内（夕）

体育館二階の卓球練習場。

数十名の卓球部員が練習している中で、

麻己と航助がラリーを行っている。

航助がラリーの回数を数えている。

航助「389、390、391」

麻己、球を打ち返し損ねる。

麻己「あっ」

航助「かっっ、惜しい！」

航助、卓球台に手をつく。

航助「あとちよつとで400だったな」

麻己、脱力して息を吐く。

麻己「ごめん」

航助「ドンマイドンマイ」

航助、麻己と目を合わせる。

航助「休憩すつか」

麻己「うん」

麻己と航助、卓球練習場の隅に腰かける。航助は胡坐、麻己は体育座りである。

航助「大分、勘が戻って来たんじゃないか？」

麻己、何度も右手でグーとパーを作る。

麻己「3週間も真面目に練習すればね」

航助「流石だな」

航助、天を仰ぐ。

航助「大会まで後1か月ちよつとか」

麻己「先は長いね」

航助「そうか？」

航助、視線を落とす。

航助「意外とすぐだなって思ったけど」

麻己「気持ちの問題じゃない？」

航助「というところ？」



麻己「僕は早く終わらせたいからね」

航助、苦笑いする。

航助「悪いな。でも」

麻己「ん？」

航助「そろそろ次のステップに進まねえと」

麻己「次のステップ？何のこと？」

航助「結局、今のところシングルの練習しか

できてないだろ？」

麻己「まあ、そうだね」

航助「ダブルスの感覚を掴まねえと」

麻己「そうだねえ」

麻己のズボンのポケットでスマホが振動する。麻己、スマホを取り出して画面を見る。

麻己「時間だ。バイトいかなきゃ」

航助「ちょ、待ってっ」

麻己「何？」

麻己、立ち上がる。

航助「ダブルスの戦略を練りたいんだ」

麻己「また明日の練習中に聞くよ」

航助「練習は削れねえ」

麻己「そう言われてもね」

航助「それに、練習を踏まえて作戦会議した方が絶対効率的だって！」

麻己「でもこれ以上卓球に時間は割けないよ」

航助、呻く。

麻己「じゃ」

麻己、航助に背を向けて歩いていく。

航助「待ってくれって」

航助、立ち上がった麻己の腕を掴む。

麻己「そういう約束だったじゃないか」

航助「お前だって勝ちたいだろ？」

麻己「それはまあ、勝てる方がいいけど」

航助「だろ？」

麻己「でも、これ以上は時間が勿体ない」

航助「頑張ったのに報われない方が勿体ねえ」

麻己、ギョツと自らの身体を抱く。

麻己「（小声で）そんなの普通だよ」

航助「えっ？」

麻己のスマホが再び振動する。麻己、

スマホの画面を見る。

麻己「スヌーズか。とにかくもう行くから」

航助「電話でもいいんだ！ 作戦会議だし」

麻己「電話だろうがなんだろうが」

麻己、ポケットからイヤホンを取り出して装着する。

麻己「夜は客以外と喋らないと決めてるんだ」

航助「ダチより客かよ！」

麻己、スマホを操作し、リスニング音声聞きながら卓球場を去る。

練習中の卓球部員の一人が航助を見る。

卓球部員「フラれたな、チビ助！」

航助「うるせー！」

航助、後頭部をポリポリと掻きながら唸る。航助、ハツと顔を上げる。

○まいまい・ホール・内（夜）

麻己と西澤を含む女装した店員らがカウンタ―で接客をしている。  
ホールの扉が開く。

フードを被り、スポーツバッグを背負った航助が入ってくる。

西澤、航助の元へ向かう。

店員 A が麻己の元に来る。

店員 A 「アサ」

麻己 「はい。いつ。交代？」

店員 A 、頷く。

西澤、航助の元へ来る。

西澤 「ようこそ、って、」

航助、会釈する。

西澤、ニヤツと笑ってカウンターの方

を見る。

麻己が店員 A と場所を交換しようとし

ている。

西澤 「グッドタイミングね。アサ！」

麻己 「はい」

西澤 「あなたをご指名よ」

麻己、首を傾げる。

麻己 「ご指名？」

麻己、両頬に手を当てる。

麻己「嬉しいっ」

西澤、航助の背をポンと叩く。

航助、カウンタ―越しに麻己の前行く。

麻己「ようこそ、まいまいへ！お兄様」

航助、フードを取る。

麻己「げっ、なんで」

航助「おいおい、どうした、アサちゃん？」

麻己、航助に顔を近づける。

麻己「（小声で）何のつもり？」

航助「客なら、夜だろうが相手してくれるん

だろ？」

麻己「まさか」

航助、スポーツバッグからシャーペンと赤黒バイカラーのノートを取り出す。

航助「作戦会議、付き合ってもらうぜ」

麻己、額に手を当てて深く溜息をつく。

麻己「呆れた。変わってるね、君」

航助「勝ちてえなら、普通だろ？」

麻己、フツと笑う。

麻己「ご注文は？」

航助、ニヤリと笑う

航助「牛乳ある？」

麻己、カウンターの下からグラスを取り出す。

西澤、腕を組んで頷きながら麻己と航助を見る。

○同・外観（夜）

小型ビル。

軒先に1匹の蝙蝠が止まっている。

○同・ホール・内（夜）

麻己と航助がカウンター越しに向かいあっている。

航助の前には空のグラス、足元にはスポーツバッグが置かれている。航助は細かい文字がびっしり書き込まれた赤黒バイカラートのノートにさらにシャーペンで書き込みを続けている。

麻己「その辺にしたら？」

麻己、カウンターの下から水を取り出

す。

航助「いや、まだ足りない部分がある」

麻己「後は実践しないとわかんないでしょ」

麻己、航助の前のグラスに水を注ぐ。

航助「それもそうだな」

航助、グラスの水を一息に飲み干す。

航助「サンキュー」

麻己「他に何か飲む？」

航助「甘いモンほしいな。疲れた」

麻己「おまかせでいい？」

航助「ん？ああ、できれば牛乳入れてくれ」

麻己「いいけど、さっきも飲んでたよね？」

麻己、カウンターの下から牛乳とシロ

ップ、シェイカーを取り出す。

麻己「そんなに好きなんだ」

航助「好きっつか」

麻己、牛乳とシロップを混ぜ始める。

麻己「何？背でも伸ばしたいの？」

航助、呻く。

麻己、航助の様子を見て言う。

麻己「あっ、ごめん」

航助「謝るなよ、チクショー」

麻己、グラスにシェイカーの中身を注いで航助に渡す。

航助、グラスの中身を揺らす。

航助「すげえな」

麻己「普通だよ。そういう仕事だし」

航助、グラスの中身を一口飲む。

航助「うまい」

麻己、微笑む。

麻己「よかった」

航助、後頭部をポリポリ掻きながら麻己から目を逸らす。

航助「酒居、いやアサか」

麻己、微笑んだまま小首をかしげる。

麻己「ん？」

航助「何でここで働いてるんだ？」

麻己「前言ったじゃない、時給が」



航助「いやでもさ」

麻己「何」

航助「今日見てて思ったけど、結構大変なバ  
イトじゃん？」

麻己「そうかな」

航助「飲みモンも作るし、客の相手もするし」

麻己「まあね」

航助「受験勉強の合間にやるにはへビーだぜ」

麻己「そんなことない。普通だよ」

航助「メイクもな」

麻己「メイク？」

麻己、顔に手を当てる。

航助「最初はガチの女子が紛れてっと思った」

麻己、唾を飲んで航助から顔を背ける。

麻己「嘘の練習もした方がいいね」

航助「いや、マジマジ」

航助、笑う。

航助「それも毎回してんだろ？」

麻己「まあね」

航助「俺だったら1日も持たねえや」

麻己「卓球ならあんなに打ち込めるのに？」

航助「そりゃモチベがちげえもん」

航助「そっか」  
航助、ハッと口を開ける。

麻己「どうしたの？」

航助「アサもなんかモチベがあんだな？」

麻己「えっ」

航助、身を乗り出す。

航助「なあ、教えてくれよ。相棒だろ」

麻己、口元が緩み、それを手で隠して  
俯く。

麻己「相棒って」

麻己、自分の着ている服を見る。

麻己「居心地がいいから、かな」

航助「居心地？」

麻己「誰にも拒絶されないってこと」

航助、首を傾げる。

航助「俺だって、お前のこと拒絶なんて」

航助、身を引こうとしてグラスを引っ  
掛け、中身を零してしまふ。

グラスの中身が航助のズボンを濡らす。  
航助「やべっ」

麻己「何してるのさ」

麻己、カウンターの下からおしぼりを取り出し、航助の方へ出てくる。

航助「ノート大丈夫かな」

麻己「服の心配しなよ。立って」

航助、立ち上がりつつノートを手に取る。

麻己、おしぼりで航助のズボンを拭く。

航助「だって俺達の努力の結晶だぜ」

麻己「はいはい」

航助、ノートをパラパラとめくる。

麻己、上目遣いで航助を見る。

麻己「で、大丈夫だった？」

航助、麻己を見下ろす。

航助「ああ」

麻己と航助、見つめ合う。麻己、航助から視線を逸らして立ち上がる。

麻己「てか」

麻己、おしぼりを投げるようにして航助に渡す。

麻己「後は自分でやんなよ」

航助「お、おう」

航助、おしぼりでズボンを拭く。

麻己、胸元を押さえてカウンター内に戻っていく。

○同・外観（朝）

日の出前。

小型ビルの軒先に1匹の蝙蝠が止まっ

ている。

蝙蝠が飛び立つ

○明津大学付属高校・体育館・外（朝）

スポーツバッグを背負った航助が、体育館に向かって走っている。航助は走りながらゼリ―飲料を飲んでいる。

○同・階段・内（朝）

スポーツバッグを背負い、ゼリー飲料を啜えた航助が1階から2階に通じる階段を駆けのぼっている。2階からラケットで球を打つ音が聞こえてくる。

航助「誰かいんのか？」

○同・卓球練習場・内（朝）

麻己が卓球台でマシン相手に練習を行っている。練習場の隅にリュックが置かれている。スポーツバッグを背負い、ゼリー飲料の容器を持った航助が室内に入ってくる。

航助「えっ、酒居！？」

麻己、視線をマシンに向けたまま言う。

麻己「やあ」

航助「な、なんで」

航助、麻己に向かって歩いていく。

麻己、マシンを停止させる。

航助「朝練？お前が？」

麻己「だめだった？」

航助「いや、逆逆。ただ、なんでかなって」

麻己「朝なら時間あるなって気づいて」

航助「ああ、そう、か」

麻己、航助から目を逸らす。

麻己「僕も、勝ちたくなっただんだ」

航助、両拳を握ってガッツポーズをと

る。

航助「しゃあっ！」

麻己、笑う。

麻己「急に大声出さないでよ」

航助、スポーツバッグからラケットを

取り出す。

航助「やろうぜ、相棒！」

航助、ラケットを握った手を麻己に向

ける。

麻己、おずおずと拳を握って航助の拳

に合わせる。

○同・外観（朝）

沢山の生徒が校舎に向かって歩いてい  
る。

○同・卓球練習場・内（朝）

麻己と航助が壁に寄りかかって座って  
いる。

麻己は手にスポーツドリンクのペット  
ボトルを持っている。

二人は荒い呼吸を整えている。

航助「ありがとな」

麻己「何が？」

航助「やる気、出してくれてさ」

麻己「そんな、普通だっつて」

航助、首をブンブン振る。

航助「お前、よく普通っていうけどさ」

麻己、目を丸くする。

麻己「そう？」

航助、小さく頷く。

航助「普通じゃねえよ」

麻己、身を強張らせる。

航助「すげえ奴だと、俺は思う」

麻己「あ、そういう、こと」

麻己、肩の力を抜く。

航助「何だと思ったんだ？」

麻己「いや、馬鹿にされてるのかと」

航助、笑う。

航助「なわけねえだろ」

麻己「だよね」

麻己、引きつった笑みを浮かべる。

麻己「冗談さ」

麻己、ペットボトルの蓋を開ける。

航助「俺にもくれよ」

麻己「自分のないの？」

航助、手をぶらぶらと振る。

航助「忘れちった」

麻己、溜息をつく。

麻己「まあ、いいけど。僕の後ね」

航助「ああ、勿論」

麻己、ペットボトルを口につけてごく



ごくと飲む。

航助、麻己の口元をぼーっと見つめる。

麻己、ペットボトルから口を離す。

麻己「はい」

麻己、ペットボトルの口の方を航助の方に傾けてを差し出す。

航助、ペットボトルの口の部分を見て、目を逸らす。

航助「やっぱいい」

麻己「どうしたの？」

航助「いや、なんとというか」

航助、息を吸い込む。

航助「後で、いいや」

麻己「そう」

麻己、ペットボトルの蓋を閉める。

○同・外観

雨が降っている。

校門から続く道のわきの花壇に紫陽花が咲いている。

蛙の鳴き声が聞こえる。

○まいまい・ホール・内（夜）

店内には何人かの店員および客がいる。  
カウンタ―内には女装した麻己がおり、  
カウンタ―越しに航助が座っている。  
航助の前には赤黒バイカラ―のノート  
が開いて置かれており、6月のカレンダー  
ダ―が手書きで記されている。  
航助はシャ―ペンを回しながらカレン  
ダ―を見ている。また、航助の足元に  
はスポーツバッグが置かれている。

航助 「あと1か月ちよつとか」

麻己 「そろそろ選手登録？」

航助 、頷く。

航助 「それとここからは」

航助 、カレンダーをシャ―ペンでつつ  
く。

航助 「コンディションの調整も考えねえと」  
麻己 「コンディション？」

航助「飯何喰うかとか」

麻己「うんうん」

航助「後は朝練で瞑想もしよう」

麻己「瞑想！？」

航助「メンタルの修業ってやつよ」

麻己「メンタルか」

麻己、右腕で自分の身体を抱くようにする。

航助「試合中最後まで冷静に戦えるようになる」

麻己、ふふっと笑う。

航助「何だよ？」

麻己「君、そういうの苦手そうだもんね」

航助「うるせーよ、ケツ」

航助、わざとらしく歯を剥き出しにする。

麻己、微笑んだ後俯く。

麻己「僕も、頑張らないとな」

航助、ニツと笑う。

航助「おう！頑張ろうぜ！」

麻己「うん」

航助 「まっ、まずは規則正しい生活だな」

航助 、スポーツバッグを手取る。

航助 「てわけで今日は帰るわ」

麻己 「早いね」

航助 「早寝早起きも徹底しねえと」

麻己 「沢山寝たら背も伸びるかもだしね」

航助 「うるせーやい」

航助 、スポーツバッグを財布から取り

出す。

麻己 「きつと伸びるよ」

航助 「気休めはよせよ」

麻己 「とーちんさんに聞いたんだけど」

航助 「うん？」

麻己 「大学から伸びる人も普通にいるって」

航助 「聞いたのか？わざわざ？」

麻己 、カウンターの下から伝票を取り

出す。

麻己 「君、気にしてたろ」

航助 「そっか」

航助 、麻己を見て後頭部をポリポリ搔

く。

航助「ありがとな」

麻己、小首をかしげて微笑む。

麻己「じゃあ、はい、これ」

麻己、伝票を航助に渡す。

航助「うん、了解」

麻己「だけど」

航助「ん？」

麻己、口元に手を当てて顔を航助に近

づける。

麻己「一杯分サービスしてあげる」

航助「マジ？」

麻己、姿勢を戻し、唇に指を当てる。

麻己「常連には普通そうするものって聞いた

からさ」

航助、へへつと笑う。

航助「サンキュー」

航助、麻己に料金を支払う。

麻己、カウンターの下にそれをしまう。

航助、立ち上がる。

航助 「じゃあ、行くわ」

麻己 「うん」

航助 、 出入口 へ 向かう 。

麻己 、 カウンター から 出て 航助 につい

て いく 。

航助 、 出入口 の ところ で 麻己 の 方 を 振

り 返る 。

航助 「アサ」

麻己 「ん？」

航助 「また、学校で」

麻己 、 微笑む 。

麻己 「うん、また」

麻己 、 両手 を 振る 。

航助 、 片手 を 挙げ 、 出て いく 。

カウンター 内 に いる 店員 B が 麻己 に 呼

び かける 。

店員 B 「アサちゃん」

麻己 、 店員 B を 振り 返る 。

麻己 「はい？」

店員 B 「お見送りしたばっかのところ悪いんだ

けど、とーちんさん呼んできてもらえる？」  
麻己「了解ですっ」

麻己、敬礼の仕草をとり、店の奥の扉  
に向かつていく。

○同・裏口・外（夜）

裏口の扉の脇で女装した西澤が煙草を  
吸っている。

道端で浮浪者風の男が毛布に包まって

西澤の様子を伺っている。

裏口の扉を開けて麻己が出てくる。

麻己「とーちんさん」

西澤「あれ、アサ？」

麻己「あの一休憩時間」

西澤「やべっ、まさか」

西澤、ポケットからスマホを取り出し  
て画面を見ると、自らの額を叩く。

西澤「アラムつけんの忘れてた」

麻己、苦笑いする。

麻己「なるほど」

西澤、煙草の火を消す。

西澤「やーばいやばい」

西澤、裏口の扉枠に手をついて、麻己の方を向く（浮浪者風の男に背を向ける）。

浮浪者風の男、ゆっくりと立ち上がる。

西澤「カナたん怒ってる？」

麻己「えー、どうだろう」

麻己、店内の方を見遣る。

浮浪者風の男、静かに西澤の背後に近づく。

麻己「別に何ともなさそうでしたけど」

麻己、西澤の方に向き直る。

浮浪者風の男が懐から包丁を取り出す。

麻己、目を見開く。

麻己「危ない！」

浮浪者風の男、西澤に向かって包丁を構える。

浮浪者風の男「西澤あ！死ねえ！」

麻己、西澤を突き飛ばす。



浮浪者風の男の包丁が、麻己の右腕を  
抉る。

麻己、悲鳴を上げる。

西澤「何すんだゴラア！」

西澤、浮浪者風の男を殴り飛ばす。

浮浪者風の男、転倒しながら包丁を取  
り落とす。

西澤、包丁を蹴り飛ばして浮浪者風の  
男の胸倉を掴む。

西澤「てめえ一体」

浮浪者風の男「お前が悪いんだ！」

西澤「ああ？」

浮浪者風の男「お前が、僕の彼女取るから！」

西澤、齒軋りする。

麻己、右腕を押さえて呻く。

西澤、ハッと目を見開いて麻己を見る。

西澤「クッソ」

西澤、浮浪者風の男の胸倉を掴んだま

ま、店内に向かって叫ぶ。

西澤「誰かー！誰か来てくれー！」

店内から店員らが駆けつけてくる。  
店員ら、悲鳴を上げる。

西澤「救急車と警察！早く！」

麻己、ギョツと目を閉じて歯を食いしばる。

○明津大学付属高校・外観

空は厚い雲に覆われている。  
校門から続く道のわきの花壇に紫陽花  
が咲いている。

○同・普通科C組教室・内

麻己が席に座って呆然と窓越しに空を  
見ている。麻己の右腕は包帯が巻かれ  
た上で吊られている。  
教室には麻己以外の生徒もおり、麻  
己を指差してひそひそと話している。  
麻己、顔をしかめて右腕を押える。

○（回想）病院・外観

T・3日前。

入院棟のある病院。

○（回想）同・病室・内

右腕に包帯を巻かれた麻己が、上半身だけを起こしてベッドに入っている。ベッドの右脇に満智子が仁王立ちしている。

満智子「どうということなの」

麻己、俯く。

満智子「麻己！」

麻己、恐る恐る顔を上げて満智子を見る。

満智子「本当に、バイトなんてしてたの？」

麻己「うん」

満智子「ママが夜勤してる間に隠れて？」

麻己、おずおずと頷く。

満智子「どうして、あんな」

満智子、自分の身を抱きしめ、ゾワッ

と身を震わせる。

満智子「あんなお店で」

麻己、俯いて拳を握る。

満智子「ねえ、なんで、どうしてなの？」

麻己、身を縮こまらせる。

満智子「麻己！」

麻己、ビクンと身を震わせる。

麻己「ごめんなさい」

満智子「理由になってないわ」

麻己、口をパクパクさせた後深呼吸す

る。

麻己「お金が、欲しくて」

満智子「どうして」

満智子、首を振る。

満智子「お小遣いだってあげてるのに」

麻己「ごめんなさい」

満智子「そのせいでこんな怪我！」

満智子、麻己の右腕を掴む。

麻己、歯を食いしばる。

麻己「痛い！」

満智子、慌てて麻己の腕を離す。

満智子「あっ、ごめん」

麻己、肩で息をする。

満智子、力なく首を振る。

満智子「麻己」

麻己、恐る恐る満智子の顔を見る。

満智子「早稲田に行くのは諦めなさい」

麻己「なっ、ええ！？」

満智子「というより」

満智子、首を振る。

満智子「東京への進学は許しません」

麻己「そんな、どうして」

満智子「こんな危険なことをする子だなんて

思わなかった」

麻己、力なく呻く。

満智子「東京で一人暮らしなんて、させられ

ない」

麻己「お願い、もう二度と」

満智子「だめです。絶対に許しません」

麻己「あ、ああ」

麻己、目を覆う。

満智子、麻己を抱きしめる。

満智子「あなたはまだ子供なの」

麻己、首を振る。

満智子「ママが守ってあげなきゃ」

満智子、麻己の頭を撫でる。

満智子「だから、ママから離れないで」

満智子、目を閉じる。

麻己、目元から手を離す。麻己、力な

く項垂れる。

○元の教室・内

麻己が席に座り、吊られた右腕を押さ

えながら歯軋りをしている。

教室には麻己以外の生徒もいる。

麻己の目に涙がにじむ。麻己、左手で

涙を拭う。

○同・体育館・卓球練習場・内（夕）

数十名の卓球部員が練習している。

制服姿で右腕を吊った麻己と、スポー  
ツウェア姿の中村信吾（17）が練習  
場の隅で向かい合って立っている。

信吾「開藤？」

麻己「うん。いないの？」

信吾「学校には来てたけど」

信吾、練習している部員らを見渡す。

信吾「ここにはいないな」

麻己「そっか」

麻己、肩を落とす。

麻己「どこにいるかわからない？」

信吾、腕を組んで唸る。

信吾「結衣に呼ばれてたような」

麻己「玉川さんに？」

信吾、頷く。

信吾「体育館の裏の方に行ってたな」

麻己「わかった、ありがとう」

麻己、信吾の前を去ろうとする。

信吾「そうだ、酒居」

麻己、振り返る。

麻己「何？」

信吾「何であいつのこと探してんだ？」

麻己、右腕を押える。

麻己「謝らないといけないんだ」

信吾「謝るって？」

麻己「ダブルス、できなくなっちゃったから」

麻己、ギョツと目を閉じる。

信吾「いやでも、怪我はしようがないだろ」

麻己、首を振る。

麻己「何回も練習して、沢山話した」

信吾、頷く。

麻己「作戦まで練ったんだ」

信吾「ああ」

麻己「二人で、勝つために」

麻己、深呼吸する。

麻己「それを無駄にしてしまった」

信吾「そうか」

麻己「ごめん、もう行くね」

信吾「おう」

麻己、練習場を出ていく。信吾、その



背中を見送る。

○同・裏手・外（夕）

空は厚い雲に覆われている。

航助と結衣が向かい合って立っている。  
二人ともスポーツウェアを着ている。  
航助が片手で後頭部をポリポリと搔き、  
反対の手で赤黒バイカラーのノートを持  
っている。

結衣「じゃあ、その作戦ノートどうするの？」

航助「うーん」

麻己が体育館の角を曲がって姿を現す。  
麻己、二人を見て体育館の角に身を隠  
す。

航助「どうしようもねえだろ」

結衣「シングルスには使えないの？」

航助「ああ、無理だ」

航助、ノートに目を落とす。

航助「ダブルスに特化した作戦を組んだんだ」  
結衣「応用は」

航助「できないなあ」

航助、溜息をつく。

結衣、僅かに進み出る。

航助、息を吐く。

航助「まあ、いい記念品だな」

結衣「記念？」

航助「友情の証ってやつ」

麻己、左手で自分の身を抱く。

結衣、航助に向かって進み出る。

結衣「勿体ないよ！」

航助、結衣を睨む。

航助「でもしようがねえだろ、俺だって！」

航助、拳を握る。

航助「今度こそ勝ちたかったの」

麻己、俯いて右腕を押える。

結衣、上目遣いで航助を見る。

結衣「ねえ、航助」

航助「なんだよ」

結衣「私、航助の力になりたい」

航助「えっ？」

結衣「私と、組んでほしいの」

麻己、目をカツと開いて結衣を見る。

航助「お前と？」

結衣「男女混合の部門もあるでしょ？」

航助「ああ、そうだったな」

結衣「チーム戦とは別枠になっちゃうけど」

航助「まあ、な」

結衣「でも、航助が折角頑張ったのに、それ

が無駄になるなんて嫌！」

航助、ノートを両手で持って見る。

航助「俺だって嫌だよ」

結衣「ね」

結衣、航助の手を取る。

結衣「私、航助と一緒に戦いたい」

航助「結衣」

結衣「きつと、酒居君も応援してくれる」

麻己、右腕を握りしめ、歯軋りをする。

航助「そうだな」

麻己、航助を睨む。

結衣「じゃあ決まりね！」

航助、一瞬目を閉じて頷く。

航助「おう！」

結衣「今日から鬼のように練習しなきゃ」

航助「そうだな」

結衣「私、頑張るから」

航助「俺もだ」

結衣、頷く。

航助「でも結衣」

結衣「何？」

航助「なんていうかな」

結衣「なあに？早く言いなよ」

航助「どうして、そこまでしてくれるんだ？」

結衣「ふえっ？」

航助「お前だって、チームがあるだろ？」

結衣、もじもじと手を握り合わせる。

麻己、拳を握って体育館の壁に当てる。

結衣「航助」

航助「おう？」

結衣「実は、私ね」

麻己「開藤君！」

麻己、体育館の角から出てくる。

航助と結衣、麻己の方を見る。

航助は目を丸くし、結衣は唇を噛む。

麻己「探したんだよ」

麻己、二人の方へ地面を踏みしめなが

ら歩いて来る。

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「あー、そうか。悪いな」

麻己「話の邪魔をしちゃったかな？」

麻己、結衣を睨む。

結衣、後退りする。

航助「ああ！実は」

結衣「航助！」

航助「え？」

航助、結衣を見る。

結衣、引きつった笑みを浮かべる。

結衣「私、先に練習場言ってるね」

航助「お、おう」

結衣「じゃあ、また後でね」

結衣、バタバタと去っていく。

麻己、その背中を睨みつける。

航助「アサ」

麻己「何？」

航助「怪我はどうだ？痛むのか」

麻己「別に」

航助、怪訝な顔をする。

航助「そうか」

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「話があるんだ」

麻己、自分の身体を抱くようにする。

航助「結衣が誘ってくれたんだけど、あいつ

とダブルス組むことになった」

麻己「（かすれた声で）そう」

航助「シングルスで出るって手もあっけどさ」

航助、両手でノートを持って目を落とす。

す。

航助「お前との練習、無駄にしたくねえんだ」

麻己、より強く自身の体を抱く。

麻己「（押し殺した声で）ふうん、そう」

麻己、航助から顔を背ける。

航助「ふうん、て」

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「アサ」

麻己「何」

航助「気持ちにはわかるぜ、災難だったよな」

麻己「わからないさ」

麻己、右腕を押える。

航助「お前、部活の奴らに何か言われたのか？」

麻己「何言ってるの？」

航助「だって」

航助、後頭部をポリポリと搔く。

航助「今日のお前変だって」

麻己、鼻で笑う。

麻己「普通だよ」

航助、首を振る。

航助「何かあんなら言ってくれよ」

麻己、航助から目を逸らして歯を食い

しぼる。

航助「俺達相棒だろ！」

航助、麻己の左肩を掴む。

麻己、航助の頬を叩く。  
航助、頬を押さえてポカんと口を開ける。

航助「なっ」

航助、麻己を睨む。

航助「何すんだよ！」

麻己、航助を睨み返す。

麻己「よくも相棒なんて言えたね！」

航助「はあ？」

麻己、航助からノートを奪い取る。

麻己「これは、僕達の作戦だった」

航助「だからなんだよ」

麻己「それを」

麻己、ノートを地面に叩きつける。

航助「おい！」

麻己「勝手に他の奴と使うって決めたくせに」

航助、呻く。

麻己「あんな」

麻己、唾を飲み込む。

麻己「（震える声で）あんな女と」



麻己、ノートを踏みつけようとする。

航助、息を飲む。

麻己、ノートから狙いを外して地面を

踏みつける。

麻己、肩で息をする。

航助「酒居」

麻己「見るに堪えなかったな」

航助「ええ？」

麻己「ちよつとヨイシヨされたらデレデレし

てさ」

航助、眉を顰める。

航助「俺のことかよ」

麻己「他に誰がいるのさ」

航助、拳を握る。

麻己「大会でも」

麻己、俯いた後引きつった嘲笑を浮か

べる。

麻己「いちやつき過ぎて負けちゃうんじゃない

い？」

航助「お前なあ！」

麻己と航助、睨み合う。

航助「俺は最後の大会、絶対勝ちてえんだ」

航助、麻己を指差す。

航助「お前は！」

航助、拳を握って俯く。

航助「（小声で）わかってると思ってるのに」

麻己、目を逸らす。

航助、ノートを拾って汚れを払う。

麻己、唾を飲み込む。

麻己「（かすれた小さな声で）ごめん」

航助、麻己の台詞に重ねて次の台詞を言う。

航助「俺だって無神経だったけど」

麻己、呻く。

航助「そこまで言うかよ」

麻己「僕は、ただ」

航助「お前」

航助、震える息を吐く。

航助「普通じゃねえ、おかしいよ」

麻己、強く自分の身体を抱きしめる。

○（回想）益久戸中学校・3年4組・内（朝）

翔馬と数名の男子中学生が黒板の前に立っている。

黒板には翔馬と麻己の名前が描かれた相合傘が描かれている。

翔馬、必死の形相で相合い傘を消し始める。

○（回想）同・外（朝）

麻己（14）が扉越しに教室の様子を伺っている。

麻己は潰れた小包を抱きしめている。

麻己、その場から走り去る。

○（回想）市営住宅・酒居家・寝室（朝）

部屋内には満智子と麻己の私物が混在している。

麻己が布団に包まり、声を殺して泣いている。

部屋の隅のゴミ箱には潰れた小包が押

し込まれている。

○元の体育館・裏手・外（夕）

麻己と航助が立っている。

麻己は航助を見ながら自分の身体を強く抱きしめている。

航助は汚れたノートを手に持ち、麻己から目を逸らして力なく立っている。

麻己、膝から崩れ落ちる。

航助、一瞬麻己に目を遣るも、振り払うように目を逸らす。

麻己は俯き、えづきながら涙を堪えるように何度も瞬きする。

麻己「ごめん」

航助、ハッと息を吐いて麻己を見る。

航助「酒居」

麻己「僕、開藤君とダブルスしたかった」

航助、麻己に近づく。

航助「俺だっつて」

航助、首を振って後頭部をぼりぼりと

掻く。

麻己「僕、やっぱり普通じゃないんだ」

航助「いや。さっきのは」

麻己、首を振る。

麻己「玉川さんが、許せなかった」

航助、ノートに視線を落とす。

航助「この作戦は」

麻己「違う」

航助「えっ？」

麻己「玉川さんに開藤君を取られちゃうって」

麻己、自らの身体を抱きしめる。

航助「取られるって、別に俺は」

麻己「わかるんだ」

航助「何が」

麻己「玉川さんも、開藤君のこと」

麻己、深呼吸する。

麻己「好きなんだ」

航助「あいつが？いや、ていうか」

航助、唾を飲み込む。

航助「好きって、お前」

麻己、力なく頷く。

航助「そういう、ことなのか」

麻己「ごめん。ごめん」

麻己、左手で目を覆う。

麻己「気持ち悪いよね」

航助、口をパクパクさせるが声が出な

い。

麻己、よろよると立ち上がる。

麻己「さよなら」

麻己、ふらつきながら体育館の角を曲がって去る。

航助、ハッと口を開けて麻己の去った方へ手を伸ばす。

航助「酒居！」

ぽつぽつと雨が降り始める。

○まいまい・入口・外（夜）

土砂降りである。

小型ビルの1階から地下へ続く階段の前にポップな字体で「カフェ&バー

まいまい」と書かれた看板が掛けられており、その上に「準備中」と書かれた札が掛けられている。

○同・裏口・外（夜）

土砂降りである。

制服姿で右腕を吊った麻己が裏口の扉の前で雨に降られながら蹲って泣いている。麻己、呻いて右腕を押える。麻己が右腕から手を離すと、包帯に血が滲んでいる。傘を持ったスポーツウエア姿の航助が肩で息をしながら歩いて現れる。航助、傘を広げながら麻己に近づく。航助、麻己の上に傘を掲げる（航助自身にはかかっていない）。

麻己、顔を上げて航助を見る。

麻己「開藤君？」

航助、呼吸を整える。

麻己「濡れてるよ」

麻己、ふらふらと立ち上がり、傘を掴んで航助の方に寄せようとする。航助は首を振って逆に麻己の方に寄せようとし、押し合いになる。航助、傘を投げ捨てる。航助「正直、気持ちの整理はできてねえ」麻己、目をギュツと閉じ、左手で耳を塞ぐ。

航助「最後まで聞けよ！」

麻己、ハツと目を開け、航助を見る。航助、麻己の目を見つめる。

麻己、おずおずと頷く。

麻己「わかった」

航助、頷く。

航助「俺」

航助、ふーっと息を吐く。

航助「皆が思うほど卓球好きじゃねえんだ」

麻己「嘘」

航助「勝てるから好きだった」

麻己「ええ？」



航助「チビの俺でも勝てるからさ」

麻己「そう、だったの」

航助「勝ちたいから、練習するけど、ずっと辛い、苦しいつて思いながらやってた」

麻己「意外過ぎるね」

航助、苦笑いする。

航助「苦しくなきゃ練習になんねえけどな」

麻己、頷く。

航助「でもさ」

麻己「うん」

航助「この2か月、初めて卓球が楽しかった」

麻己「本当？」

航助、力強く頷く。

航助「酒居が、アサがいたから」

麻己「僕が、いたから？」

麻己、口を押える。

航助「俺」

航助、上を向いて涙を堪える。

航助「アサと大会出たかった」

麻己「僕も」

麻己、涙を流す。

麻己「僕もだよっ」

航助「さよならとか言うなよ」

航助、麻己を真つすぐ見る。

航助「俺、アサと離れたくない」

麻己「こ」

航助「俺の」

麻己「航助君！」

麻己、航助の胸の中に飛び込む。

航助、麻己を抱きしめる。

### ○路上・歩道（夜）

T・1年後。

街路樹として桜の木が植えられている

歩道。桜の木は満開である。

航助（18）が歩道を歩いている。

空から雨粒が落ちてきて航助に落ちる。

航助、空を見る。

空を2匹の蝙蝠が飛んでいく。

○まいまい・ホール・内（夜）

カウンター内に女装した麻己（18）

と西澤（22）がいる。

小沼（31）を含む数名の客がいる。

小沼「いやー、アサちゃんが復帰して本当に

良かったよお」

麻己「もう、お上手なんだから」

小沼「本心だつて」

小沼、手でハートを作る。

小沼「アサちゃんは僕の推しだからね」

麻己、頬に片手を当てて笑う。

小沼「本当、ドキドキだつたよ」

麻己「何が？」

小沼「東京に行くかもつて聞いてたからさ」

西澤「小沼さん、その話は」

麻己「いいの、とーちんさん」

西澤「えっ」

小沼「僕なんかまずいこと言つた？」

麻己「東京はママに止められちゃつて」

小沼、ハツと口元を押える。

小沼「そういうことなの、いやあ、ごめん」

麻己「だからいいってば」

麻己、微笑む。

麻己「東京じゃなくても大丈夫になったから」

小沼「えっ、何かあったの？」

麻己、指を唇に当てる。

麻己「ナイショっ」

小沼「ええー？」

奥の扉から髪の濡れた店員Cが入って

くる。

店員C「遅刻してごめんなさい」

麻己「いいのいいの」

麻己、小沼の方を見る。

麻己「じゃ、またね」

小沼「あっ、もしかして退勤？」

麻己「うん、とーちんさん、後よろしく」

西澤「お任せよ！」

西澤、指で鼻の下を擦り、店員Cを見

る。

西澤「もしかして、外めっちゃ雨？」

店員C「そうなんですよお」

麻己「参ったな。傘ないよ」

小沼「アサちゃん、気をつけてね」

麻己「はい」

麻己、店内の一同に手を振って奥の扉から出ていく。

○ま い ま い ・ 裏 口 ・ 外 ( 夜 )

雨が降っている。

私服の麻己が裏口から出てくる。麻己、雨を見て顔をしかめる。

麻己「うわっ」

麻己、ふう、と息を吐いて外に出ようとする。

航助の声「アサ！」

麻己が振り向くと傘をさした航助が歩いて来る。

航助「帰ろうぜ！」

麻己「うん！」

麻己、航助の持つ傘の下に入る。

麻己と航助、2人で1本の傘を持って、  
くつついて歩いていく。

以上